

富山県立魚津高等学校 アメリカ研修六日目報告書

いよいよ Kaplan に通う最後の日となりました。今日は授業開始の 30 分ほど前から続々と登校し、全員遅刻なく集まりました。時間の読めないバスや複雑な地下鉄の乗り替えなどボストンの交通機関に苦戦を強いられましたが、ようやく最後に攻略、そしてそれぞれが責任を持って行動した結果かと思います。

Kaplan では毎週金曜日にその週に卒業する生徒を送り出すフェアウェルパーティが行われます。今週の卒業生の中にはもちろん魚津高校の生徒たちが含まれています。他の卒業生は修了書を受け取るとスピーチをし、Kaplan での思い出や感謝の気持ちを述べますが、我々はグループなので全員で感謝の気持ちを伝えることになりました。数日前から何をするか話し合いを始め、二転三転しながらも決まったのは“皆に楽しんでもらえるもの”をしようと言うこと。発表は三名の生徒によるダンスからスタートしました。だいぶコミュニケーションが取れてきたとはいえ、どうしてもシャイなイメージを持たれていた彼らがこのようなダンスをするとは予想外だったのか、踊り出すと驚きの声が上がりました。どんどん盛り上がっていき、終盤生徒全員が加わると大歓声！見よう見まねで参加してくれる留学生もいて、フロアの雰囲気が一気に明るくなりました。次に全員で合唱をしたのですが、当初は練習の必要が無い日本の歌にしようと言う流れになっていました。ただ何を歌っているのか分からない曲よりも、英語の歌をみんなで歌いたいとの声上がり、この時期に多くの人が知っているだろうクリスマスソングを歌うことに。とは言っても全員で練習する時間的余裕はありません。どうするのだろうと思っていたところ、生徒の一人が歌詞カードを準備し配っていました。今回の出し物については全て生徒が中心となって進めており、自分が出来ることを自らする姿勢が見られました。この曲は先生や他の留学生の方が馴染みがあったため、生徒たちが助けられた形となりましたが、見てもらうだけではなく参加してもらうという目的は達成。そして生徒たちが最後まで望んだのは“交流”をすることです。発表が終わってから時間も許す限り日本のお菓子や折り紙を手に話しかけたり一緒に写真を撮ったりしていました。

研修最後のプログラムは日本人企業家・松川原氏の講演です。実は昨日の CIC を案内していただいた方でもあります。松川原氏はアメリカでマーケティングの会社を経営されており、人工知能の時代をどう生きて行くのか、どのような観点で仕事を選ぶのかと言うテーマでお話しいただきました。将来の夢や目標を聞かれることはあっても、自分の人生をどう生きたいのか、を考えることは無いのではと言う問いかけや、人の目を気にすることで自分がしたいことが見えなくなるという話に生徒の目が一層真剣になりました。そして一番彼らの心に響いたのは、失敗についての捉え方です。日本人は失敗を駄目な事と考えるが、アメリカでは失敗がないと成功はないと考える、失敗から学ぶことは多いが、日本人はそれを恐れるため、結果的に得るものが少なくなっていると言うのです。松川原氏自身、経営で失敗した経験があると言うことですが、失敗したことがある人は何がいけない

のかを知っているため信用されるのだと言う実体験も話して頂きました。アメリカ人はとにかく行動、日本人はまず考えると言い、これらの違いは生徒たちも肌で感じてきたことです。勇気が出ず、行動までに時間がかかってしまう状況にいた生徒たちはやはり失敗を恐れていたのですが、これらの話が今後彼らにとって一步を踏み出す背中を押してくれるのではないかと思います。



フェアウェルパーティでの生徒代表挨拶



全員でダンス！



全員でクリスマスソングを合唱



留学生と最後の交流



松川原氏の講演



講演後も話したりない生徒たち